

さいたま市東部と川口市北部に広がる見沼田んぼで農作業をする学生たちが、見沼の歴史や現状を紹介する雑誌「見沼学」を創刊した。編集者の1人で、東大大学院博士課程で緑地計画学を学ぶ石井秀樹さん(27)は「地元の人の高齢化が進むなか、見沼の歴史や魅力を記録し、多くの人に知ってもらいたかった」と創刊の目的を話している。

見沼の魅力 雑誌で紹介

編集したのは農業ボランティア団体「見沼・風の学校」。メンバーは20代の学生が中心で、農作業を通じて見沼の保全活動を続けている団体だ。

創刊号では「福祉農園の公共性を問う」と題した特集を組んだ。県が98年に見沼田んぼの保全を目的に始めた公有地化事業の変遷や、同団体が拠点とする農園の運営をめぐる行政との摩擦を紹介しながら、事業の問題点を指摘している。

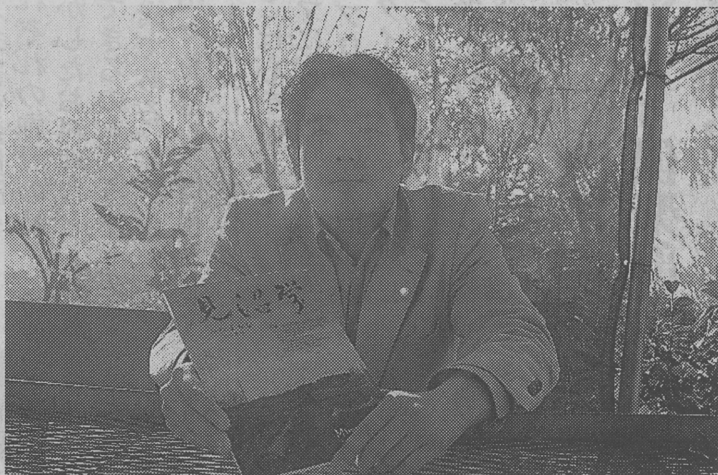
石井さんは自宅が見沼田んぼにほど近く、2年前、「風の学校」の存在

農業ボランティア院生ら創刊

を知って農園に通い始めた。子どもの頃遊んだ見沼の歴史や新たな魅力を発見するうちに、「農園での取り組みを文章に残したい」と思い、メンバーらと雑誌の創刊を決めた。地元住民の高齢化が進んでいることも理由の一つになったという。

年内には、人間の営みが見沼の風景の形成にどう影響したかをテーマに2巻目を発行する。

創刊号はB5判50頁、600円。浦和区の須原屋本店で発売中。問い合わせは同事務局(☎048・886・5754)へ。



「『見沼学』を通じた新たな出会いにも期待している」と話す石井秀樹さん＝さいたま市緑区で